

第7回門真市魅力ある教育づくり審議会

(第5回子どもの学ぶ意欲向上部会) 議事録

開催日時 平成30年2月6日(火) 午後3時20分～午後4時40分

開催場所 市役所別館2階 第1会議室

出席者 新谷龍太郎、片山仁、川村早余子、上甲尚、中川智広

事務局 満永教育部長、寺西教育部総括参事、中野教育総務課長、田代こども政策課長、杉井学校教育課参事、向井学校教育課長補佐、小西こども政策課副参事、永田教育総務課主査

傍聴者 0人

議 事

新谷部会長

「子どもの学ぶ意欲向上部会」を開催させていただきます。

それでは、まず事務局から今回の部会での議題について説明をお願いします。

事務局(中野教育総務課長)

今回の子どもの学ぶ意欲向上部会では、「家庭の子育て支援」及び「子ども一人ひとりの課題に沿った支援」について討議をお願いします。

討議時間は現在3時20分でございますので、4時30分頃まで討議いただき、その後、10分の休憩時間を挟み、4時40分には全体会にてまとめの報告をお願いしたいと考えております。

なお、討議の柱といたしましては、部会の次第にもございます通り、先ほど説明のありました子どもの未来応援ネットワーク事業の取組も含めて、「①子どもの自尊感情の伸長や学ぶ意欲の向上に資するような教職員・地域の方々等の関わり方について」、「②チーム学校の考え方を門真市において進めるにあたり、SSW(スクールソーシャルワーカー)やSC(スクールカウンセラー)をどのように活用することが最も効果的か」についての2点で進めていただきますようお願い申し上げます。

新谷部会長

ではまず一点目といたしまして、子どもの自尊感情の伸長や学ぶ意欲の向上に資する教職員、地域の方々の関わり方ということですね。先程の子どもの未

来応援ネットワーク事業の取組を踏まえまして、ではどうしていけばいいのか、というところなんです、ご存知でしたか皆さん、この事業は。初めて私は伺ったんですけれども。

川村委員

登録しています。

新谷部会長

そうですか。

川村委員

でも、あまり活動の内容がよく分からないっていうのが、正直なところですよ。

新谷部会長

なるほど。ではまた後で、その辺についても伺おうと思うんですけれども、まず、この事業の背景としては貧困の話があったと思うんですが、ちょっと聞き漏らしたんですけれども相対的貧困率が府平均よりも高い、低い、どちらなんでしょうか。

事務局（田代こども政策課長）

相対的貧困率としては高いです。

新谷部会長

高いですね。厳しい状況だと、しんどいということですね。はい、分かりました。ですので、各委員から、まずご自身の見ている範囲の中で、貧困を感じるような、そういった場面があるかないか、あればどんな具体的な状況があるのかということをお聞かせいただきますでしょうか。では上甲委員から。貧困に関して、しんどい状況だなというのを。

上甲委員

そうですね。やっぱり私も門真ですとずっと仕事をしてはいますが、就学援助を受けている方とか、生活保護を受けているご家庭がやっぱりかなりと多いなど。率でいっても、30%台後半だったんじゃないかなと思うんですけれども、3学年全部合わせると。まあ、各家庭個々にケースは違うんですけども、実際、諸費の納入状況であるとか、そういったのもやっぱり管理職としては気になるところで、職員と連携しながら、そういうご家庭にいろいろアプローチしています。また、たまにあるのは、就学援助等の制度があるのにもかかわらず、申請をされていないご家庭に対して、呼びかけを行っています。

けれども、実感としてはやっぱり、門真独自のそういった経済的に厳しいご

家庭があり、そういう家庭の子どもは、様々な支援も必要となってきますので、しっかり見守ってあげないといけないなと思いますね。

例えば、本校では12月に三者懇談を行いました。しかし、当日になって来ないというご家庭があつて、連絡もなかなかつかない。電話かけても出ていただけない、折り返しもない、7時・8時に家庭訪問をしても誰も出て来られない。

それが貧困と結びついているかといえば、必ずしもそうではないと思いますが、非常にアプローチが難しいなと思います。担任から相談を受けたり、協議したりしながら、方策を考え、悩んでいるところです。

新谷部会長

ありがとうございます。そうですね。連絡つかないっていうのは、私も、自分の大学でありますね。あと学生でも一番話を聞いてほしい学生が来ないとかつていうことがよくありますけれども。川村委員はいかがでしょうか。間近で聞いている貧困の話とか。

川村委員

多いんだろうなとは思いますが。近くでは、そんなに貧困ということを知ることではないですし、学校の間ではないので、きちんとした情報は把握していませんけど、でもやっぱり冬に寒そうな服を着て出歩いているとか、夜遅くまで出歩いているとか、兄弟関係でどちらかの子どもを可愛がって、連れて出るのは、もう片方の子は家に置きっぱなしで泣き叫んでいるとか、いろんな情報は聞きます。しんどいんだろうなっていう人は、きっといるんだろうなとは思いますが。

新谷部会長

もうここで、学校と地域の情報の差とか、貧困のシグナルの違いというのが見えたと思うんですけども、学校の方はデータであつたりとか、実際の当事者ですので、連絡つかないとかつていう形で把握されるのに対して、地域の方は、服装であつたりとか泣き声とか、そういうような間接的な情報で推察せざるを得ないという、情報のギャップがあるかなと思いますね。片山委員と中川先生はいかがでしょうか。

中川委員

私は現場にいますので、上甲先生がおっしゃったことや、あと、進路の担当もしていますので、自分たちが中学生の時は、公立高校受けるにしても私立高校の併願をするのが一般的なんですけれども、授業料が所得に応じて減るといっても、私立高校はやっぱり、制服代とか勉強合宿代とか、授業料以外の部分も結構高いので、やはり説明会聞かれたあと、授業料無償であっても、やっぱり私立は受けられません、というようなご家庭もあります。特に私は門真市に

来る前は違う市でも教師をしておりましたので、門真市は割合でいうと高いと感じています。

それで、どうしても公立となりますので、絶対に合格してもらわないといけません。それで、より安全な、というか、合格の可能性の高い高校を受けていただきます。その他にも、自分の勉強したい学科がある高校はここだけ交通費がかかるから、それこそ自転車で行ける範囲で子どもに合った高校ってどんなところがありますかという親からの相談もよくあるというのが、感じるところです。

新谷部会長

ありがとうございます。片山委員はいかがでしょう。

片山副部会長

私も以前、子どもが通っている中学校から、何かしらの支援を受けている家庭が4割に達しているという話を聞いたことがあります。そういった中で、果たして、その何かしらの支援を受けている方たちが目に見えてくるかと言ったら、そういうわけではないんです。誰が受けているのか分からない。支援を必要としている人なのかどうかというのも、見た目では判断が付かない状況です。

新谷部会長

ありがとうございます。この目に見えないというか、周りから見えないってところが、良い面もあると思います。私は知らないですけども、昔はそういう貧困というものが目に見えていた。ほんとに戦後すぐとかっていう時は見えていたと。で、これは相対的貧困率を語るときによく出てくる調査結果ですけども、諸外国と日本の保護者かな、意識調査をしたときに、20項目ぐらい並べて、あなたの子どもの与えたいものはなんですかというのがあって、お小遣いとか服とか、いろんなものが並んでるんですね。それで、すべての子どもがこういうのを受けなきゃいけないかという、2つ同じ項目で調査したときに、そのギャップが、日本はすごく大きいんです。他の国では、自分の子と同じようなものを、他の子も持つべきだと考えるらしいんですけども、何か日本では、その落差が激しいというのがあって、貧困というのが、目に見えないので、共通の課題として、なかなか認識されづらいという状況もあるのかなと思います。先ほど川村委員から、子どもの未来応援ネットワーク事業についてでありましたけれども、実際どのような形で動いているんでしょうか。

川村委員

私は、登録しただけで、特に何もしてませんね。

新谷部会長

登録というのは、情報はどこからくるんですか。

川村委員

どこからだったかな、なんかいろんなところから来て、一応研修を受けに行
って、登録して。

新谷部会長

研修はこちらでされるんですか。市役所か何かで。

川村委員

何箇所がいろんなところでしてるみたいですよ。私は市役所で受けました。

新谷部会長

登録をして、何か活動としては自分たちで地域で見た情報あげるっていうよ
うな状況なんでしょうか。

川村委員

研修を聞いた内容では、きっとそうなんだろうなというように認識していま
す。そういうちょっとしんどい子どもたちがいたら、情報提供してくださいと
いうことなんだろうなと思うんですけども、個人的には、情報提供してくだ
さい。でもその子がどうなったかは、個人情報があるのでお教えできませんと
いうところが、その子がどうなったか分からないことに対して、そんなボラン
ティアで、こっちは本当に心配で言っているのに、そこがどうなったか分か
らないというところに対して、ほんとに市民の人は動くのかとか、あまりこう、
はっきり見えてこないという思いが私の中にあります。

新谷部会長

なるほど。情報提供をする先というのは、どこになるんですか。

川村委員

どこになるんですかね。

新谷部会長

メールか何かですかね。

事務局（小西こども政策課副参事）

この専門チームがございまして、ちょうどこの部屋の隣にあるんですが、そ
この電話番号、アドレスと電話番号を配布しておりますので、メールでも結構

ですし、学校であれば推進委員が学校のほうに行きますので、その時にお声掛けいただければと考えております。

新谷部会長

そうですか。学校ではどういうふうな認識をされていますか。この事業について。何か直接学校に関係がありますか。

上甲委員

うちの学校でいうと、未来応援チームの推進委員の元教諭の方2名で、たまたま1名の方が、去年の3月まで本校に勤めておられた方で、もう一人の方ははずはな校区にある小学校で勤めていた方なのです。だから、うちの校区をすごくよく知っているとうことで、非常にありがたいと感じています。本校の生徒も推進員さんに、今、協力していただき、相談をさせてもらっています。

新谷部会長

ああ、なるほどなるほど。

上甲委員

家に行ってもらったりとか。

新谷部会長

元教諭の方とか、校区をご存知でしたら、どういう点を意識してみればいいのかっていうのが、多分経験的に分かってらっしゃると思うんですけど、市民としては、なんででしょう、こういう項目がサインだよとか、こういう項目に気をつけて見ていただいたらどうですか、みたいなものはあるんですか。先程の公園で日中にいてるというのがありましたけれども。

川村委員

ほんとに分かりません、それは。すいません。

ちょっと聞いてもいいですか。学校側としては、このシステムの応援団員の方とつながっているのですか。

上甲委員

学校は直ではつながらないというふうに聞いているんですけども。推進委員の方を通じてと聞いています。

事務局（小西こども政策課副参事）

一定、校長会の方で、各校区の応援団員の方の名簿は配布をさせていただいてありますが、直接学校から、その個人の方へ連絡するということは想定して

おりません。

上甲委員

そうですね。そのように把握しています。

川村委員

その応援団員さんが、ちょっと気になります。この近所だから、様子を聞こうかなって、学校がそこに連絡するっていうことはないんですね。

事務局（小西こども政策課副参事）

基本的にチームを介してもらおうという形になります。

新谷部会長

なるほど。何かありますか。

片山副部会長

まず、私も応援団員のことです。ちょっと気になったんですけど、現在 635 名の方がおられるということなんですけど、この人数より、さらに増やしていく方向で考えておられるのですか。

事務局（田代こども政策課長）

基本としましては、一校区 100 名で、中学校が六校ありますので、600 名というのを、まずは目標としておりました。ただ数については、出来る限り多い方が、子どもを見る目というのが多い方が良いので、基本としては増やしていきたいと考えています。ただこれ以上増やすと次の課題が出てきますので、それをどう動かしていくか、そのところで、説明にもありましたスキルアップ研修ということで、まあ高齢の方もおられますし、一番動いていただく方をメインに据えて、組織的な方法もあるかと思えますし、どう向かっていこうかということは課題ではあるかと思えます。この応援団の話につきましては、個人情報というのはどうしても法に触れるというところが前提にありまして、なかなか、理想を言えば、昔でいうならちょっとおせっかいなおばちゃんが、やってくれていた時代に戻したいというのが、正直なところなんですけども、それでは安易に個人情報が広がってしまう。

場合によっては、保護者の方同士をけん制し合うというか、監視をし合うということにもなってしまうということもあって、基本的には一方通行での情報提供をしてもらうという形に考えております。ただ先ほどお声をいただいたように、私たちの活動って何、というのは正直そういう声は、出ております。これをどこかのところで応援団同士で交流を図る場で、名前を言えないけれども、こういうことにつながったんですというところを、私どもから皆さんのように

動いて頂いてる方に、伝えないといけないということは正直持っておりますので、そのような課題も含めながらやっていきたいなと思っております。

新谷部会長

実際のところ、川村委員がやってみようかなと思ったところとか、こんなことがあったらもう少しボランティアの人も続けるのになみtainな、気持ちの面とか待遇の面でもいいですけども、何かありますか。

川村委員

もともと、子どもたちの環境作りに興味があって、活動しているのです。これとは別で、家庭教育支援相談員っていうのもやらせていただいたことがありまして、子どもたちの環境をどうにか変えたいっていう思いもあって、今回こういうのがあるからっていうので研修を受けてみました。だからって、これまで自分なりに PTA 活動などもしており、学校ともつながって、しんどい子どもさんを家児相につないだこともあります。私がやってきた活動と、今回のそれを照らし合わせた時に、あまり魅力を感じなかったというか、それだったらもっと人とつながっている、学校のつながりとか、今活動していること、それをもう少し大事にして、もっと環境をどうにかできるっていうのがあるのかな、ないのかなっていうのが、今、正直な気持ちです。

新谷部会長

やっぱり一緒にやってる感というか、つながりがあったり顔が見えたりしたほうがいいということですかね。

川村委員

分からないんですよ。その辺が多分、自分にそんなに責任がなくてもいいから、本当にしんどい子達をちょっとでも救ってあげられるんだってところぐらいの思いだったら、多分情報提供するよっていうのかもしれないんですけど、私の中ではきっとそれよりももう少し上のところで何とかしてあげたいっていう思いがあって、動いているから余計にそうなのかもしれないです。

新谷部会長

なるほど。何とかしてあげたいという気持ちがあるので、こうなったよっていうのが少なくとも見えてこない、どうなんだという。

川村委員

そうですね。

新谷部会長

分かりました。事業の内容としては個人的には面白いなと思ったんですけども、聞いてみると、また面白いですね。

川村委員

一番今日、いてはいけないような気がします。

新谷部会長

いやいや、いらっしゃらないと分からない、とても今日のキーパーソンだと思います。実際のところ10月1日から始められて、寄せられた電話の件数とかってというのは、その辺はどうなんでしょうか。

事務局（小西こども政策課副参事）

電話の件数というか、今取り扱っているケースが40件ありまして、そのうち地域の応援団員から寄せられた情報が8件、残りはほぼ学校、当初はやはり応援団員の数も少なかったですので、地域から情報というのはあんまり入ってこなかったのは事実です。その時期はやはり学校からの情報が主になっておりました。ただし年明けてから、応援団員からの情報ばかりになってきておりました。ようやく地域が動き始めたのかなという実感はあります。ただし先程の課題でもあるように、もう少し応援団員の方々に見守りの仕方、その子の背景の見方であったり、そういう部分をちょっとスキルアップという形でさせてもらって、さらに情報が入るようにしていきたいなと今のところ考えております。

新谷部会長

件数として、学校の方が件数が多いのは先程の情報の落差がありますので、もちろんだと思うんですけども、上がってくる種類がもしかしたら違ってくるのかもしれないなと思います。例えば先生は日中出歩けないわけですので。学校から上がってきた案件と、応援団員が見つけた案件の、違いとか、エリア、その辺がもう少し見えてくるとこの事業のすみ分けというか、位置づけが見えてくるかなと思うんですが、これもまだ始まったばかりですので、またその辺分析いただければと思います。ちなみにこの8件というのはどんな内容ですか。差し支えない範囲で。

事務局（小西こども政策課副参事）

そうですね。一つは、ちょっと家児相案件になったんですけども、ちょっと泣き声が聞こえるであったり、あとは、応援団員のお孫さんが小学校に通っていてそのお孫さんがクラスにこんな子がいるというお話を聞いてこられて。

新谷部会長

なるほど。先ほど冒頭で川村委員が泣き声ということをおっしゃっていましたが、やっぱりこの声は助けて欲しいというサインですので、これをある種届けるチャンネルが一つあるということと、子ども経由で先生には言えないけれども、別のルートでつながってくると。これは少し、子どものそういう状況が上がってくるチャンネルが多いに越したことはないと思います。中川先生とか片山委員には、この事業の可能性というか、見込みとか、始まったばかりですので、批判的なところも含めて、建設的に見るとこんなところができるというかなってというのは、何かありますか

片山副部長

システムのりもかなり確立されており、非常に良いことだとは思いますが、先ほど川村委員からもあった通り、核になってくる応援団員の方が、目的や趣旨に今一つ賛同できていないというか、責任を持って取り組めない、ある程度の裁量権を持ってできる話じゃないってということなんで、その辺りのモチベーションをどう維持してもらえるようにするのかということが課題だと思います。また、人数を増やしていくということですが、果たして、闇雲に応援団員の方を増やしてしまうと、あらたな懸念や危惧される部分が出てくると思います。例えば、個人情報の問題とかですね。応援団員の方についても、精査していく必要が一方ではあるのではないかと考えますが、いかがでしょうか。

事務局（田代こども政策課長）

こちらとしては、この事業を知っていただくというところが必要かなと思っているんですけども、なかなか難しいところがあって、実際活動される中でも、団員になっていただいているけれども、日頃は動けないよという方も正直なところおられますので、実際核となって動かれるのは、同じ人数ではないなというのが正直なところですので、そこはその人その人、核になる人を見ながら、どういう動きができるのかっていうのは、考えていかないといけないと思います。

片山副部長

例えば、家で子どもを注意していたら、子どもに泣かれてしまって、すぐに通報されてしまうのではないかという懸念もありますし、一方で、お隣の子どもさんが、注意を受けて外に出されていると、それを“しつけ”としてみるのか、あるいは通報すべき事案なのか判断に困ることが想像できますし、仮に通報したことによって、何かしらの対応が行政からなされた場合に、通報されたご家庭の方が、誰が通報したのかと疑うことで近所付き合いがギクシャクしてくる懸念もあります。

また、先ほど、お孫さんを通じて応援団員の方からお話を受けられたという話があったと思うんですけど、そこに何かしらの支援が行政からあった場合

に、それをよく思わないご家庭である可能性もあると思います。その場合、誰が通報したんだということになり、子どもの中で友達関係が崩れてしまうことを懸念します。

他には、貧困かどうかを判断するにしても、応援団員自らの生活水準と比較して判断してしまう可能性もないとは限らないですし、家庭の収入が多くても儉約しているために子どもだけがみすぼらしく見えてしまうこともあると思います。地域のコミュニティや関係性が悪くなることは本当に怖いですし、通報するにも勇気がいると思います。

新谷部会長

ありがとうございます。この事業も含めて、これは虐待案件が増えた時からの課題であると思うんですけども、問題としては3つのフェーズがあると思うんですね。どのように、貧困や虐待って問題を認識するかっていうフェーズと、それをどのように発信することで生じる人間関係であったり近所付き合いの問題と。最終的にはどう介入していくのかっていう第3のフェーズ。それで、ここは多分ご近所の方は別として、学校としてはどこかで限界を感じる部分があると思うので、実際いかがでしょうか。そういう事案があったときに、学校としてはどこまで話を聞いて、どこまで介入できるのか、限界のようなものを感じたケースというのがありますでしょうか。

上甲委員

虐待とかだったら、例えば明らかにアザを作って学校に来て、子どもに話を聞いたら、親に手をあげられたとなると通告義務があるから、そこは慎重になります。学校も親との関係が壊れる、難しくなるというリスクは高いので、慎重になりますけれども、子どもの様子を見ながら、子ども守ってあげないといけません。子どもの命を守るのが一番大事だと思うので。これは通告せざるをえないと判断した時には、校長の判断で、子ども家庭センターに電話したりというのはあります。

私が校長になってからは、まだないのですが、そういう例があったというのは聞いています。かつて、自分が教員をやっていた時には、そういうことがありました。校長先生と相談して、通告したケースはあります。

新谷部会長

中川先生、いかがでしょうか。

中川委員

そうですね、悩んでいる間に、中学生は自分で言いに来る子どももいます。どうしても我慢できずに、教師にもなかなか相談しづらかったりすると、自分で市に言う子どももいるということは聞いたことがあります。そうになると、逆

に、子ども家庭センター等の事案になってしまって、学校は逆に介入できなくなるというか、情報交換とかはある程度はあっても、そちらの判断になるので、学校として、その子どもに対してどのようにフォローができるのかといったことが悩ましいところでもあります。

新谷部会長

子ども自身がこういう時にどこに言えばいいんだよって知ってるっていうことは、とても大事かなと思いますね。私、アメリカの高校に留学してる時に、虐待があったら、ここに電話するんだよっていうのを啓発する劇団に入っていたんです。それで、障がい持っている子どもたちとか、実際に虐待を受けている子どもたちへの劇団なんですけども、小学校に行って、虐待の疑われるようなケースを上演して、こういう時があったらここに電話しなさいっていうのを最後に言う劇団なんですけども、子ども自身が発信するっていうのは、とても興味深いお話かなと思いました。はい。

それで、今までの話どちらかというと、通報するとか、そういう面ばかりだったんですけども、前回やはり保護者が孤立しているっていうふうな調査結果がありましたので、今回のこの応援団員も含めて、どのように共感的理解とか、保護者同士をつないでいけばいいのかとか、そもそもこの事業の目的は子どもの自尊感情を高めたりとかですね、学ぶ意欲を向上させるというのが目的ですので、この事業も含めて、教員であったり、応援団員が、どのような関わり方をする必要があるのかっていう点を少し、最後にお聞かせいただければと思います。少し難しい質問ですけども。片山委員いかがでしょうか。先ほどこの事業の難しさをおっしゃっていたんですけども。

片山副部会長

そうですね。スタートされたばかりなので、しばらく様子を見ていく必要もあると思います。運用していく中で、いろいろな問題や改善点が出てくると思いますので、それに対応していくっていうところではないかと思います。

新谷部会長

そうですね。この事業がもう少し認知されると、隣が通報したなって言われなくても済むのかなと。この応援団員からという話になるかもしれません。中川委員いかがでしょうか。

中川委員

そうですね。先ほど話があったように、役割分担じゃないですけども、教員OBの方々に動いていただく部分で、学校としては助かっている部分もあります。先ほどのチーム学校じゃないですけども、教師の手の届かない所で、家庭訪問して下さったりとか、気にかけて下さったりする人が増えるのは、

一つありがたいかなと思います。収入を得るために、お仕事が忙しくて、家を空けていることが多くて、保護者の方も孤立というか、相談先がないというところに、お仕事、例えば育休が長かったりとかしたら、ママ友というのでしょうか、普段から悩みを相談するような人もいない方もいるでしょう。保育園の送り迎えだけでとか、小学校の児童クラブだけでとか、という人たちに対しての、声かけというか、コミュニティ作りの一つの、部署じゃないですけども、その応援団になってくれば、もっと良い方向に進むのではないのでしょうか。

新谷部会長

ご質問と自分の意見なんですけれども、まずこれ 635 人の、構成比率、元教員がどれぐらいで、一般市民がどれぐらい、例えば PTA 関係者と PTA 関係者以外とか、大体の割合とか教えていただければと思いますが。

事務局（小西こども政策課副参事）

635 名のうち、民生委員が 150 名ほど入っておられます。大きな団体としましては、民生委員であったり、保護司、保護司と民生委員は結構被っている方が多いんですが、大きな団体のブロックとしてはその 2 つであって、あとは、シルバー人材センターに登録されている方、その他としてはバラバラというか、いろんな方々が入っていただいている形になっています。

新谷部会長

そうですか。元先生ばかりが集まっているのかなというイメージがあったんですけども、そうではないんですね。

事務局（小西こども政策課副参事）

そうですね、元教員に関してはチームの方で、応援団に関しては、元教員に関して特別募集をかけているわけではありません。

新谷部会長

そうなんです。民生委員の方がまあ、一つのブロックになっているということなんです。

あともう一つは、例えば京都市なんかですと、保育所がママ友の集まりになっていて、そこで子育てのニーズを引き上げて、福祉につないでいくという拠点があるんですけども、今回、教育と福祉を融合するっていう形なんですけども、そういう就学前の保育所とかの取組は、何か、この事業とどうつながっているのかなと思わせて。

事務局（田代こども政策課長）

この子どもの未来応援ネットワーク事業は、対象は 0 歳から未成年までを対

象としておりました、幼稚園、保育園についても、推進委員さんに行ってもらって、どういう状況かなどは聞いてもらってますので、一応対象には入れています。生まれたてから、検診後、どうなっているか、その連携も広げていきたいなということで、生まれたてから、未成年までを対象にしていきたいと考えております。

新谷部会長

分りました。ありがとうございます。上甲委員は、実際に学校の現場で、保護者からの相談を受ける場合もあると思うんですけども、共感的理解であったりとか、気をつけてらっしゃることは何かありますか。

上甲委員

そうですね、そういうサポートが必要な家庭であるのに、逆に学校にも相談をして下さらない。保護者集会や参観、懇談等に来てもらえないというところが、学校の大きな悩みの一つなのです。そういったところの情報を、例えば地域の方とか、知り合いの保護者の方からいただけて、それだったら学校としてこう動こう、そのようになっていったら、学校としては非常に助かります。

新谷部会長

なるほど。

上甲委員

要するに、本当に連絡のつかない、学校にもほとんど来てもらうこともできないっていうのが、私達としては最も心配で、困っているんです。担任を含めて、学校としては悩んでいるところなんで、そういうところあたりをネットワーク事業でフォローしてもらえたら、学校として非常にありがたいと思います。

ただ学校から応援団員さんに対して、こういう子どもいますという発信はできないから、そのあたりの難しさはあります。

新谷部会長

なるほど。学校から情報発信できないんですね。

上甲委員

ただ、チームの推進委員さんにはできるということなので、情報交換させてもらいました。

新谷部会長

では、最後に川村委員。こうなったらなというところを。

川村委員

さっき、上甲先生が言っていたのを聞いて、やっぱりこのみらい応援ネットワーク事業と、学校が欲している、したいっていう情報交換が、現状ではできにくいのかなっていうのを感じたのが一つです。あとこの4つの討議の柱っていうのを読んでいて、自尊感情の伸長や学ぶ意欲の向上っていうところに関していうと、この事業で拾えるのかなと思います。でも、拾えなくはないんですよ。拾うんだったら、応援団員は全く関係なくて、きっと別事業で立ち上げるべき話が、一つになったので、こんなになってるのかなって今感じました。応援団員は、基本的にはしんどい人たちを拾い上げるだけで、それ以外何もできません、一方通行。そこを割り切ることができる方はこれをすればいいし、でもその一歩先に進んで、自尊感情をどうにかするとか、子どもの環境をどこかにつなぐというのは、応援団員にはできなくて、でもこっちの応援チームはできるんですね。チームができて、学校がつながるんだったら、そこでやればいいんじゃないかなと思います。それを含めてとところで、きっと市民の中にも、ほんとに子どもの学力とか、そういうところを感じている人もいるんだろうけど、そのやりとりとか、人間関係の構築が、その核となる、子ども中心として核になるのは学校だと思うのですが、そこの連携ができないんだったら、っていう人も結構いるだろうし、だから何か、っていう感じですかね。

新谷部会長

すごい事業の整理ができましたね。そういう、例えば学校の欲しい情報を拾い上げる段階の事業と、それを含めて、子どもたちの自尊感情をどう高めていくのかっていうことを考える段階の事業と、私の中ではちょっと整理しました。ありがとうございます。はい。それでは一つ目の柱が終わりましたので、休憩時間を10分という話なんですけど、7分だけにしていただいて、残りでソーシャルワークのほうに行きたいと思います。

— 休憩 —

新谷部会長

それでは2つ目の柱の話なんですけれども、スクールソーシャルワーカーとスクールカウンセラーの配置について、門真市がモデル事業をするという、実際に動いているところがあるので、そこを少しお話しいただければと思うんですが、実際に中川先生と上甲先生の学校では、スクールソーシャルワーカーとか、スクールカウンセラーっていうのは配置されているんでしょうか。

上甲委員

カウンセラーはもうずいぶん前から、国が言い出して、各中学校に配置されて、週1回ですけどね、年間35回でしたっけ、1日6時間というので、全中学

校に配置されています。小学校については、一部の学校だけというふうに聞いていますけれども、カウンセラーはもう十数年、その制度は一定、中学校では馴染んでいて、いろんな子どもとか、保護者がカウンセリングを受けたり、場合によっては家庭訪問、うちの場合、家庭訪問をしてきてもらうケースもあって、火曜日に来てくださるんですけど、今日も昼からいって来てはりました。カウンセラーはすごく学校に定着したと思いますよ。

新谷部会長

ああそうですか。

上甲委員

はい。スクールソーシャルワーカーについては、学校に毎週1回とかいう形で配置されているわけではないので、うちの場合でいうと、ケース会議が必要な子どもがいれば、そのケース会議に、市の子ども悩み相談サポートチームのSSWの方も入ってもらう上に、子家セン等、いろんな団体も入って行っております。そこで、様々な見立てをしてもらって、すごく助かっており、今後の動きについても整理できるので、非常に助かっています。

新谷部会長

中川先生はいかがでしょう。

中川委員

そうですね、上甲校長と同じ中学校のことになりますが、前も言わせてもらったかもしれませんが、スクールカウンセラーが週に1回だと少ないような気がします。予約がいっぱいで、取れないこともあります。また、ほぼ月曜日に来られるのですが、仕事の都合で、なかなか月曜日に休めないが相談をしたいという保護者の方については、どうしても時間もあるので、何時までですか、いやこの時間までなんです、みたいな形で、どうしてもその時は勤務の時間を少しシフトしていただいて、融通きく時に、ちょっとご無理いって動かしてもらったこともあります。先程の話ともつながってくるんですが、カウンセリング予約の保護者が急にキャンセルしたり、なかなか連絡がつかなくて、すみません、今日ちょっとやっぱり無理です。という電話があったり、そこをね、どううまく調整するかということが課題です。

新谷部会長

片山委員から見て、このスクールカウンセラーとか、ソーシャルワーカーってというのは、なじみのある話ですか。

片山副部会長

正直、なじみはないです。

新谷部会長

ないですか。なんのこっちゃみたいな感じですかね。

片山副部会長

そうですね、今のところ無事にといいますか、問題なく子どもも学校に通っていますので、なじみはないですね。

新谷部会長

川村委員はいかがでしょうか。

川村委員

私は、知っている保護者とか子どもたちから、スクールカウンセラーさんとちょっと話をするとか、そういうのを聞いたことがありますし、その中で感じたのはやっぱり、人と人なので、合う合わないというのがすごくあるんですよ。

学校はすごく信頼していて、すすめるんだけど、子どもからしたら、それこそ逆に、カウンセラーに急にキャンセルされたということを聞いたことがあります。当日になって、ちょっと今日行けませんということを、学校を通さず、直接その子どもに電話するっていうのを聞いたことがあります。

そういったことを思うと、有効だけれど、学校だけに頼るのもどうかと思うし、その子どもにとっては、そこが合わなかったら、でもそこそこって言われたら、行き場がなくなるから、そういう意味ではやっぱり広く、それこそそういう時こそ応援団員とか、活用できるんだったら、同じ地域に住む人がちょっと話を聞いてみようか、みたいな、何かちょっとした広がりがあれば、すごくもっと広範囲で救える子どもたちが増えてくるんじゃないかなと思います。

すごくいいっていうか、やっぱりソーシャルワーカーさんなんかだったら、全然分からない情報で、私たちが分からないことでもプロとして、つなげてくれたりとかするじゃないですか。いろんなところの支援につなげたり。すごく大事だし、良いことだと思うんだけど、だからといってここだけじゃなくて、やっぱりトータル的にサポートしていくっていうスタンスを、取ることの方が大事なんじゃないかなと思います。

新谷部会長

これ、私の個人的な意見ですけれども、スクールカウンセラーとかソーシャルワーカーとかの協同って、実際のところ、先生との関係がうまくできているかどうかっていうので、これはある市で、ソーシャルワーカーが先生の前で講演とか研修をしたんですけれども、そんなこと知ってるわっていうような感じで、先生の方がそっぽ向いちゃったりとか、先生の方でも、やっぱり心の問題、社会の問題、家族の問題含めて、それも含めて、自分はこの子を見てるんやと

いうふうな意識を持っている先生からしてみると、ポンと、週一回来てるカウンセラーとか、ソーシャルワーカーって、全然協同ができない状況があるのかなと思うので、率直なところで、うまく先生たちと協同している学校がもし門真にあるのだったら、見たいというのが一つ、自分の関心ではあるんです。そういうところが、モデル校として、これからのチーム学校の一つの形として、打ち出していただいたらいいのかなと思うんですけども。多分スクールソーシャルワーカーとの協同って、本当に求められているかなと。で、別の観点からいうと、スクールカウンセラーとかスクールソーシャルワーカーの専門的な知識は、本当に忙しい中で先生が対応するには、ちょっと難しい勉強だと思うんですね。例えば18歳以降の自立支援計画みたいなものを、多分ソーシャルワーカーは作らなきゃいけないんですけども、そのためにはいろんな関係法規であったりとか、使えるリソースとかっていうのを、その子に合わせてマッチングするのが、良いソーシャルワーカーで、それができないだめなソーシャルワーカーもいるんですけども、その辺も含めてグッドプラクティスというか、良い事例があれば、聞きたいと思うんですが、中川先生とか上甲先生、あの学校とかうちの学校は、うまく協同してるよとか、こんな良い事例があるよっていうのは、ありますか。

上甲委員

カウンセラーは、先ほども言ったようにもう十数年以上、ずっと学校に定着しています。

新谷部会長

先ほどの家庭訪問は、親御さんの話も含めて聞くってということですか。

上甲委員

両方ですね。学校に来ることのできない子どもさんですが、カウンセラーとの関係が非常に良い場合は、家に来てくれるのを楽しみにしているということや、親御さんも子どもがカウンセリングをしているのを横で一緒に聞いているという例もあります。親子ともども、カウンセラーとの関係が非常に良いので、楽しみにしてくれているという例もあるのです。カウンセラーも、今は無理しなくていいよとか、今エネルギーをためてください、とか、言ってくれて、子どもが楽になったり親が楽になったりといったケースもあります。私の経験している例で言うと、カウンセラーと学校がうまくいってない経験はあまりありませんし、割と上手にできていた方だと思いますけどね。

新谷部会長

それはどういう段階でつなぐんですかね。担任の先生の方で、ある時期手放すというか、つなぐ、、、

上甲委員

いや、手放すんじゃないなくて、私達、教員にはなかなか言いにくいこととか、私達ではなかなか聞き出せないこととか、分からない背景とか、そのあたりはカウンセラーの人はプロですから、非常に上手に聞かれるし、そういう部分で、私たちは単に任せるのではなく、本当に協働して、一緒に、保護者や子どものことを見立ててやっていくというスタンスで臨んでいます。したがってカウンセラーにかかるということで、私たちとの関係が切れてしまうなどと心配はしたことがないです。

新谷部会長

今、見立ての協働という言葉が出てきたんですけども、やっぱりその担任としては、見立てと、カウンセラーの見立てを、すり合わせてこんな形にと。

上甲委員

そういうのもあります。まれに、先生と子ども、あるいは保護者との関係が、うまくいってない時など、逆にカウンセラーの力を借りながら、どういうふうアプローチをしたらいいだろうなど、連携しているケースはあります。

新谷部会長

そうですね。あと、スクールソーシャルワーカーのケース会議の時に入られるということですけど、もう少し具体的なお話がありますか。

上甲委員

スクールソーシャルワーカーの方が入ってもらうことによって、こういうところにつないだらどうですかとか、この子どもにはこういうケースがいるんじゃないですかとか、こうした助言をいただきながらやっているの、うまくいったりいかなかったりですけど、2か月に1回くらいのペースでケース会議をしています。

新谷部会長

なるほど。中川委員いかがでしょうか。

中川委員

私も担任をしいてたときには、不登校であったりとか、悩みを抱えたりしている子どもで、先生に言いに行くんやったらとか、私にも言ってくれるんですけど、それをうまく引き出したり、まとめたりということで、紹介して、本人も受けたり、お母さんと一緒に来たりとか、本人も保護者も同意されたから、先生も一緒に入ってくださいみたいに、4人で話したこともあります。

そういうところでの、話すというよりは、連携できるところはして、もちろん、先生には聞かれたくないようなことだったら守秘義務があるので、カウンセラーの方にも、連携できる部分でという形ですが、やっていたこともありますし、それこそ川村さんがおっしゃったとおり、お兄ちゃんの時に合わなかったから、先生、カウンセラーさん変わってませんよねって言われると、変わってませんね、みたいな会話をしたこともあります。

逆に、今年、違う先生になったし、ちょっと受けてみますということをやってみました。

あとは、もともと知り合いのカウンセリングの資格を持っている人がいて、そこにちょっとかかっているケースもあります。それで向こうの先生が、学校の先生とも話したいと言っているんですけど、リクエストがあったので、そのセンターとかまで行ったこともあります。

だから、学校では、なかなか難しいといった場合は、何とかその子どものためにということで、動けるところは、動こうとしています。

新谷部会長

月曜日とか火曜日に、カウンセラーが来られる時っていうのは、先生とは打ち合わせの時間みたいなものはこまめに取っているんですか。

上甲委員

はい。今日は、こういう保護者が予約入ってますみたいなので、先にそういう打ち合わせをしてから、カウンセリングに臨んでもらっています。

新谷部会長

そうなんですね。なるほど、分かりました。

上甲委員

それをやるのは、大体うちの場合は、養護教諭が多いですけどね。養護教諭が大体情報持っているのです。

中川委員

うちも、養護教諭と、コーディネーターが入っていたりします。

新谷部会長

あと、スクールソーシャルワーカーなので、貧困であったりとか、虐待も含めての関わりが必要になってくると思いますが、その辺の事例とかっていうのはありますでしょうか。

中川委員

特別支援が必要な感じの子どもさんで、保護者の方も少し支援が必要かなという場合には、学校だけではなくて、福祉関係もそうですし、医療関係とつないでいただいたりとか、私たちが思っている以上のところと、ぱっぱとつないでいて下さるといふか、段取りが良いですね。ああ、もう連絡します、来てもらいます、みたいな形でパッとケース会議を、思っている以上の拡大が作られたりとかすると、ああ、すごいなと、正直思います。だから、事がとんと進んでいくこともあります。すごい広く専門知識を持っているんだろなという感想を持ってしまうような体験したことがあります。

新谷部会長

やっぱりそのあたりは、専門家が入ってくれてよかったな、みたいな。

中川委員

そうですね。

新谷部会長

こういうスクールソーシャルワーカーとかスクールカウンセラーと連携した、学校のモデルを文科省は打ち出しているわけですけども、どうでしょうか、門真ではそういったモデル校みたいなものはあるのでしょうか。

上甲委員

SSWは中学校で常に配置されているところはないと思います。

中川委員

ケースによって、その都度お願いをしています。

新谷部会長

ケースでしかないってことです。そもそもそのスクールカウンセラーとかソーシャルワーカーの数って、足りているんですか。全部入っているのでしょうか。

上甲委員

中学校はカウンセラーが週1回入っていますけど、小学校は全部ではないし、様々なケースがあるので、小学校の先生に聞かないと分かりませんが、やはり欲しいのではないですか。

中川委員

小学校は全部は足りていないと。

新谷部会長

はい。中学校は今のところ週1回ですけど、ホントのところはもう少し増やしてほしい気持ちもありますが、勤務時間は先ほど中川先生がおっしゃったように、うちでいえば基本10時4時とか5時なので、お仕事で夜しか来られないお母さんとか保護者の方は入れないし、そういう難しさはありますね。子どもによっては、放課後4時以降にカウンセリング希望したい子もいてるわけですよ。授業は普通に受けたいと。授業抜けたくないという子もいてるので、その場合は時間をずらしてもらったりしますが、もうちょっと、一日の勤務時間が長かったらありがたいかなと思う時は結構ありますね。

新谷部会長

それこそ、もう少しカウンセラーの数が多かったら、午前はAというカウンセラーが来てて、放課後はBというカウンセラーがずっと来て、合わなかったらこっちの方で、というような。もうちょっと人が増えたら、そういうマッチングも多様になると思うんですけども。最後の5分で、先程の事業のお話との関連が面白そうかなと思いますので、応援団、未来応援ネットワークと、このスクールソーシャルワーカーとかスクールカウンセラーとか、その辺を含めて、こういうふうなイメージの学校組織図というか、こんな事業があったらいいのになとか、最後5分でも、これまでの議論の中で、これ言い残したとか、最後にこれを一言言っておきたいとか、ありますか。どちらの議論でも構いませんけど。全体会の中でこれは言っておいてほしいとか、これは言わないでほしいというものはありますか。

なければまとめに入ります。

では、議論を最初から追っかけていきますけれども、最初の議題の中では、貧困を感じる場面として、学校の中では、就援率であったり、諸費未納であったり、あと受験のところちょっと見られるところがあると。地域では、服装とか夜中とか泣き声とかっていうところで、多少サインを感じるけれども、普段の生活の中ではなかなかそういう貧困っていうのはなかなか見えづらいですし、実際のところどうなのかっていうことは分からない、隣の家のこと分からないっていうところです。この事業については、実際のところは、なかなか応援団としてはやりがいという部分で、これから改善すべき点もある、というところですね。特に個人情報の問題があって、フィードバックがなかなか受けにくいというところがあるという話でした。学校との連携という部分でいうと、学校としては、元教員の方の、校区をよく知っていらっしゃることで、そこから情報を得たりとか、サポートしていただくっていう所は、ありがたい部分がある。ただここも、応援団であったり学校であったり、いろんなところで情報がスムーズには交流できない部分があるので、少し飛躍しますが、座談会みたいな所で、自由に顔を合わせて、情報交換がするような場があれば、もう少しそのあたりの、話が、声が通るんじゃないかな、みたいな話がありました。

あと、スクールソーシャルワーカーであったりとか、スクールカウンセラーの話でいうと、かなりカウンセラーの部分は、なじんできている、定着してきているということですね。で、スクールソーシャルワーカーの場合も、今のところ2ヶ月に1回、ケース会議というところで、動いている。それで、先生を含めた連携というの、できているという学校というのがあるので、そのあたりをもう少し、形としてモデル的なところで打ち出していくと、他の学校でも活用できるのかなと。このあたりの、スクールソーシャルワーカーとかスクールカウンセラーの、活用の仕方というのを学校どうして情報交換とかされてるんですか。

上甲委員

生徒指導の担当者が集まる会議等ではやっているはずですよ。

新谷部会長

じゃあ活用の仕方については、まだ十分に、各学校で完全に知っているわけではないと。

上甲委員

そうですね、実際そういう場に顔を出した人間は分かると思うんですよ。担任なり生徒指導担当なり、養護教諭なり、とかね。管理職入ります。したがって、そのような経験している人は、増えてきていると思います。とりわけケース会議などは。

新谷部会長

分かりました。事例としては、不登校の事例であったり、自閉の事例であったりというところで、やっぱり専門家の意見というのが、教員では、なかなか手の届かない所もサポートいただけるという体制であるけれども、例えば小学校なんかですと、数が足りてなかったり、中学校の方では、回数を増やしてほしいというニーズがあるとか、そういったところがあると。このあたりを報告させていただきます。

では、時間となりましたので、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。